

小特集①

教皇フランシスコの韓国訪問

教皇フランシスコは8月14～18日まで韓国を訪問した。今回の訪韓は、2013年3月の就任以来初のアジア訪問で、1989年の先々代の故ヨハネ・パウロ2世以来、約25年ぶりである。教皇のアジア訪問としては、ヨハネ・パウロ2世のカザフスタン訪問(2001年)以来となる(毎日8/13)。韓国のカトリック信者数は、約544万人で人口の11%ほどを占めるが(2013年末)、このところ信者数は急成長しているとされる。教皇がアジア初の訪問国として、地域最大のカトリック国フィリピンではなく韓国を選んだ理由にはこの信徒数の急増にあるとの見方もある(毎日8/19)。

1. 朴大統領らの出迎え

8月14日午前、特別機でソウル郊外の軍用空港に到着した教皇フランシスコを朴^{パク}権^{クネ}恵大統領が直接出迎え、カトリック関係者や脱北者、旅客船セウォル号事故遺族らも歓迎した(朝日8/14ほか)。教皇と朴大統領は大統領府(青瓦台)で会談し、朴大統領は教皇の訪韓が「長い分断の傷を治癒し、朝鮮半島に希望の統一時代を開いていく貴重な契機になると信じている」と語った。教皇は「朝鮮半島に和解と安定をもたらすための努力に感謝し、後押しする。それだけが平和を保つ確かな道であり、地域全体、戦争で疲弊した世界全体の安定に影響を及ぼす」「我々は過去の不正を忘れるのではなく、寛容と忍耐、協力を通して乗り越えることが求められる」とスピーチした(朝日8/15ほか)。

朝鮮半島の平和を呼びかける教皇の訪問に際して、韓国カトリック教会は北朝鮮の信徒を招待していたが、北朝鮮側は8月18日から始まる米韓合同軍事演習などを理由に招待拒否を伝えた(毎日8/15)。また教皇が到着した14日、韓国軍合同参謀本部は北朝鮮が南東部の元山から日本海に向け短距離ロケット砲計5発を発射したと明らかにし、米韓合同軍事演習への反発とともに、南北和解を訴える教皇訪韓への牽制との見方が出ている(毎日8/15)。

韓国の新聞やテレビは、教皇訪韓を大きく報道し、日本よりも先に韓国を訪れたことを評価する論調も多い。韓国のカトリックは80年代の民主化運動を支援し、「社会正義を実現する」イメージが強く、中央日報によると朴大統領も60年代の中学生時代に、カトリックの洗礼を受けたという(読売8/15)。

2. 「聖母の被昇天」と「列福式」のミサ

8月15日午前、教皇は中部の大田^{テジョン}にあるワールドカップ競技場で全国から駆け付けた信者5万人の前で、「聖母の被昇天」のミサを行った。カトリック教会の典礼暦で「聖母の被昇天」の祝日にあたるこの日、教皇は韓国のキリスト者たちが社会の様々な場において精神的刷新のための寛大な力となっていくよう、聖母に祈った(カトリック8/24ほか)。

16日、ソウル中心部の光化門広場では、王宮の正門だった光化門の前に巨大な十字架とステージが設置され、韓国人殉教者ら124人を最高の崇敬対象である「聖人」に次ぐ「福者」

とする大規模野外ミサが開かれた。18～19世紀の朝鮮王朝末期に激しく迫害され、最初の殉教者とされる尹持忠^{ユンジチュン}パウロら「第1世代」信徒123人と中国人神父1人。尹持忠は儒教社会の厳しい規範に反して、カトリックの儀式で母親を葬ったため殺害された。朝鮮半島にカトリックが伝えられたのは1784年のことで、宣教師ではなく、北京で洗礼を受けた信者が帰国して広めた。儒教を支配原理とする朝鮮王朝は反体制思想として危険視し、迫害していた。このミサにはセウォル号事故遺族を含む信者ら80万人が参列した(毎日8/17ほか)。式典前のパレードでは、一般市民を含む数十万人がバチカンや韓国の国旗を振って教皇を歓迎した。光化門広場から約200km南の南大門までの道路が封鎖され、周辺では地下鉄の駅も封鎖され、厳しい警備体制が敷かれた。パレードの移動に小型車を選ぶなど、飾らぬ振る舞いが市民の高い関心を呼んでいる。「貧者や弱者のための質素な教会」が信条の教皇は訪韓にあたって「一番小さな車」を要望したという。防弾仕様はない車であった(読売8/17ほか)。

教皇は同じく16日に、ソウルの南100kmにあるカトリックの福祉施設がある「コットンネ」(「花の村」の意)を訪問した。障がい者や修道者、信徒らと会い、彼らの献身的な態度、信徒の指導的な働きを称賛した。中絶された子どもたちを弔うための象徴的な墓地で黙祷もささげた(カトリック8/24)。

3. 「アジア青年の日」大会への臨席

第6回アジアン・ユース・デー (AYD : Asian Youth Day) が韓国の大田教区で8月10～17日に開かれ、アジア23ヶ国の青年2千人が参加した。15日、これに韓国の青年4千人が加わり、6千人が中西部の唐津^{タンジン}にある「ソルメ聖地」で教皇との交流を行い、南北に分断されている朝鮮半島の統一をアジア各国の若者とともに祈願した。教皇は演説の途中、草稿にはなかった朝鮮半島問題に触れ、「二つのコリアがあるのではない。コリアは一つだが、分断されているだけだ」と自らの言葉で強調した。南北分断の悲嘆を訴えた若い韓国人女性信徒のあいさつを受け、「北朝鮮の兄弟のために、統一のために祈ろう」、南北は同じ言葉だから統一への希望が持てると語った(毎日8/16)。「ソルメ聖地」は韓国の最初の司祭で殉教者である聖アンドレア^{キムデゴン}・金大建(1821～46)の出生地として巡礼地になっている。また、カトリック信者20組の不妊に悩む夫婦が祈った結果、子どもを授かったとされる聖地である(カトリック8/24ほか)。

17日には、教皇は殉教地「ヘミ城」でAYD閉会ミサを行った。アジアの青年リーダーを含む4万人以上が参加した。教皇は、今回の大会のテーマ「アジアの若者よ、目覚めなさい。殉教者の栄光があなたの上に輝く」を強調し、「神の愛を示す」よう促し、青年たちが「社会生活に参加することは権利であり、義務でもあります」と指摘した。AYDに教皇が臨席するのは初めてで、南北再統一のための沈黙の祈りに導いた。韓国西部にある「ヘミ城」は、18～19世紀にかけての100年間、数千人のカトリック信者が投獄され、拷問を受けた殉教地である(カトリック8/31ほか)。

この「アジア青年の日」大会に参加するのが教皇の訪韓の主な目的とも言える。信徒数急増中の韓国は布教戦略のモデルである(カトリック8/24)。バチカンには、韓国訪問を機にアジアでの布教活動を本格化させ、成長著しいアジアで若者を中心に信徒獲得につなげる狙いがある。ローマ教皇庁報道官は訪問に先立ち、「アジアの重要性は誰もが認識しており、

福音宣教者はその可能性に目を向ける」と強調していた (産経 8/16)。

4. 旅客船セウォル号沈没事故遺族への対応

今回の訪韓で教皇はセウォル号事故遺族に対し強い関心と配慮を示した。15 日に行われた「聖母の被昇天」ミサでは、教皇は遺族を招待して犠牲者を悼むとともに、「この惨事が韓国国民に団結と連携をもたらしますように」と祈りをささげた (カトリック 8/24 ほか)。

16 日の野外ミサ、パレードでも教皇は、セウォル号事故遺族の前に車を停めて、声をかけたり手を握るなどして慰めた (毎日 8/17 ほか)。17 日午前 7 時、駐韓教皇庁大使館で、入信を希望していたセウォル号事故遺族のイ・ホジン氏のために教皇は 1 時間をさき、洗礼を受けた。洗礼名は教皇と同じくフランシスコ、教皇に直接洗礼を受けるのは 25 年ぶりとのことである (毎日 8/19 ほか)。

5. 教皇と元慰安婦との対面

韓国のカトリック教会で教皇フランシスコの訪韓準備委員会は 6 月 30 日の段階で、ソウルの明洞^{ミョンドン}聖堂で 8 月 18 日に行われる「平和と和解のミサ」に元従軍慰安婦たちを招待していることを明らかにした。元慰安婦の中にはカトリック信者も多いという。世界的に影響力が強い教皇と元慰安婦らの対面が実現すれば、国際世論に影響を与える可能性があるかと予測された (読売 7/1 ほか)。

訪韓最終日、教皇は 18 日に行われた「平和と和解のミサ」に臨んだ。ミサは南北分断が続く朝鮮半島や、領土問題で対立が深まる東アジアに向けて融和を呼びかけるのが目的で、過激なイスラム組織に迫害を受けているイラクの人々に対しても祈りが捧げられた。ミサには約 1 千人が参加したが、朴大統領も出席し、韓国人拉致被害者家族 5 人、脱北者 5 人、朝鮮戦争前に半島北部で洗礼を受けた 30 人も招かれた。また旧日本軍の元慰安婦の女性 7 人も招かれ、教皇は聖堂に入場した際、車いすに座った元慰安婦の女性たち一人ひとりの手を握り、ことばに耳を傾けた。元慰安婦の出席について、バチカンと韓国カトリック側はともに、「苦しむ人たちをなぐさめ、癒すのが聖職者の務めであり、政治的意図はない」としている (朝日 8/18 ほか)。教皇は社会的弱者に寄り添う「貧者の教会」を掲げていて、教皇庁のロンバルディ報道官は、慰安婦の招待についても「貧者の教会」路線の反映との見方を示した。しかしながら、元慰安婦 10 人が暮らすソウル郊外の施設「ナムムの家」が、韓国の教会に対し、教皇の地方視察に入れてほしいと要望したが、断られたという (毎日 8/14)。

教皇と元慰安婦との対面について、日本側は静観の姿勢を保っている。教皇の韓国訪問を巡って日本政府は、朴大統領の発言を注視してきたが、14 日の教皇との会談で慰安婦問題への言及は避けられ、外務省筋は「教皇と元慰安婦が面会したことに政府としていちいち反応する必要はない」と語った (毎日 8/19 ほか)。

6. 教皇訪韓による経済効果

韓国紙『中央日報』(8 月 14 日付) の「お金になります。ありがとうフランシスコ」という

見出しの経済面トップ記事がソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) で騒動を巻き起こした。ネットユーザーらは「教皇訪韓が金儲けか」「命より金を追い求める新聞社であるのが分かった」など、韓国国内の一部メディアが経済的効果を露骨に強調している報道に対し非難が出ている。他にも、経済紙『エコノミー朝鮮』(8月8日付)では「セウォル号で傷ついた韓国経済 回復期待」というタイトルの記事や、教皇マーケティングに余念のない流通業界の期待を反映した「8月のクリスマス効果、5,500億(ウォン)の祝福」(『アジア経済』)、「教皇訪韓、沈滞した韓国経済復活の契機 期待」(『ニュースY』)などの記事がある。あるネットユーザーは「教皇フランシスコの姿と行動の理由に注目しなくてはならない。随行する車のブランドや車種、時計のブランド、モデル、価格などに関する内容ばかり浮き彫りにするツイートを見ると、正直、『中央日報』と同類だと思う」と偏ったマスコミ報道を批判した(ハンキョレ社会 <http://hani.co.kr/arti/society/media/651180.html>)。

『朝鮮日報』(8月19日付)にも「教皇特需、5千億ウォン効果」という見出しの記事があり、教皇訪韓の関連行事にカトリック信者が100万、外国人10万が集まってくることによる経済効果は5千億ウォンに達するという。観光・ホテル業界、レストラン・流通業界に特需があることや、教皇訪問地を中心に「ヒーリング巡礼道」の造成を推進するなど、教皇の出国後にも文化・観光資源化しようとする動きもある。教皇訪韓記念切手130万枚(約5億4,500万ウォン)も売り切れ状態と伝えている。

7. 中国への期待

バチカンと1951年に断交した中国の領空を今回初めて教皇特別機が通過した。中国が教皇搭乗の航空機の領空通過を認めたのは初めてで、関係改善への兆しとの指摘もある。教皇は、特別機から中国の習近平国家主席に宛てて祈りとあいさつを伝える電報を送った(毎日8/15ほか)。しかし、ロイター通信によると、韓国での式典に出席しようとした中国の信徒100人超のうち、約半数が参加不可能になったという。関係者の一部は逮捕されたとも伝えられる(産経・東京8/16)。

中国は共産党による建国宣言の2年後(1951年)にバチカンと断交。中国のカトリック教会は政府公認の「中国天主教愛国会」と、非公認の地下教会に分かれ、バチカンと中国は聖職者の司教を任命する権利などを巡り対立した。バチカンのパロリン国務長官は訪韓前、中国と「建設的な対話」に応じる用意を表明[→バチカン参照]。バチカンの平和外交を展開する上で「潜在的超大国」の中国との協力を目指しているとみられる(毎日8/18)。

以上で分かるとおり、今回の教皇の韓国訪問は、韓国内では経済効果を含めた大きな期待をもって迎えられたが、教皇は朝鮮半島に平和がもたらされるようにという強いメッセージを発したことが分かる。また中国、日本、北朝鮮にもそれぞれ異なった意味での影響があったことがうかがい知れる。

[文責：李和珍]